Title	「スピリチュアル・アセスメントの困難性」報告(2014 年度 第 1 回スピリチュアル研究会)
Author(s)	田村, 綾子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24-No.1, 2014.9 : 45-46
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5152
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014年度　第1回スピリチュアルケア研究会「スピリチュアル・アセスメントの困難性」報告

梅雨明け直後の７月23日、駒込の聖学院新館において標記研究会が開催された。参加者は16名で、牧師、看護師、精神保健福祉士などの臨床家と大学院生を含む研究者という多彩な顔ぶれであった。

１．講演要旨

講演は、聖学院大学教授でスピリチュアルケア研究室長の窪寺俊之先生により「スピリチュアルアセスメントの目的、限界、可能性－Thomas ST. James O' Connorらの指摘を中心にして」と題して行われた。はじめに、スピリチュアルケアの定義は未だ確立していないこと、にもかかわらずスピリチュアルケアは行われ重要性も認識されつつあること、そして、現場ではアセスメントの指標が求められていることが述べられた。実践があり重要視されながらも、定式化したアセスメント項目は無いという、一見矛盾しているようなこの状況は、しかし本テーマを掘り下げてゆくうちに、一つの目的に接近する双方向からのアプローチの途上であるという認識に落ち着いた。すなわち、現場でスピリチュアルケアを実践している人びとが、どのような項目立てに基づきアセスメントしているかの丁寧な検証により、スピリチュアルケアとは何かを定義づけることが可能となるのではないか。

資料（１）として、米国の論文「Development and Testing of the Spiritual Needs Inventory for Patients Near the End of Life」[1)]が配付された。米国看護協会においては、特にターミナル期の患者にスピリチュアルケアのアセスメントと介入は不可欠であると認識されていることを前提とし、その実態についていくつかの研究結果から、①定期的にスピリチュアルケアが行われていない、②それは教育の不足によるものである、③スピリチュアリティの定義が不明瞭であること、を本論文は指摘している。さらに５群からなるアセスメント項目（例えば、「微笑み」「誰かとスピリチュアルなことを話すか」「スピリチュアルな印刷物を見ているか」「祈るか」「友達と一緒にいる」など）が提示されていることが紹介された。

また資料（２）として「The Spiritual Involvement and Beliefs Scale Development and Testing of a New Instrument」[2)]も抜粋して紹介された。ここでのアセスメント項目は上記とは異なり、例えば「自己を超える偉大な力をもつものへの信仰をもっている」「精神的なものに満たされている」「黙想」「人とスピリチュアルな活動をしている」「苦しみの意味を見つけることができる」などがあるが、窪寺先生は、欧米のアセスメント法が日本の文化的風土や状況と合わないことを指摘し、新たなアセスメント項目を構築することの意義に結論づけられた。ご自身もこれまでにアセスメント項目を開発したが、現場では殆ど活用されていないという実態も紹介され、実践家と研究者の集う場で新たなアイデアを集積したいという本研究の意図が語られた。

さらに窪寺先生からは、①アセスメントの対象は、スピリチュアルニーズなのかペインなのかそれとも量的なものなのか、②患者、ケア提供者いずれにとってのアセスメント項目なのかを明確にしておかなければならない、という重要な二つの指摘がなされた。これらは対人援助職に共通する問題意識であるが、提供者側にとってのみ役立つ項目ではアセスメント自体が目的化してしまう。適確なアセスメントに基づくケアの提供がなされ、それが利用者･消費者側にとって有益なものとなって初めてアセスメントにも意義が生まれる。また適切なアセスメントに基づくケアの実践とそのモニタリングを行うことの有用性や、スピリチュアルケアの成果が実証されれば提供者への評価とし

て、例えば医療機関における診療報酬の算定などの可能性があることにも言及された。

2．スピリチュアルアセスメントに関する協議

協議に先立ち、窪寺先生からは患者のスピリチュアルヒストリーに着目し、患者との対話の中から汲み出してゆくアセスメント法が提案され、その際の要素として「信・望・愛」を示された。これは、「信頼」や「信仰」、「望み」や「愛の対象の有無」「愛された体験」などを表わし、キリスト教的な思想を含みつつも日本人一般にも通用するものであろう。

この後、参加者からはアセスメントというよりも患者理解（understanding）の視点ということではないか、スピリチュアルヒストリーの語り手のミステリー性をいかに見出すかがポイントであろう、“スピリチュアル”の定義があいまいで宗教色が濃くなると拒絶反応も持たれやすいことが課題である、ヒストリーの語り（narrative）をいかに引き出すことができるかは聴き手の力量にかかわる、などの意見が交わされた。総じて、アセスメントというケア提供者側からの一方向的になりがちな分析の目線よりも、患者との対話を中心とした一人ひとりの患者の人生の受け止めにおける視点や姿勢に関する、各自の実践や研究に基づく発言であった。最後に、病院チャプレン経験のある牧師より、医療者の自己満足や少しでも良くなってほしいという欲求からいかに解放され得るか、難解でもっともらしい言葉を用いずにいかに対話ができるか、そこが問われているのではないか、という示唆に富む発言が印象的であった。

なお、アセスメント項目に関して、「SHE」(Self imagine（自己像）/Home（ふるさと）/Encounter（出会い））や「へいわ」（平安/イライラすること/和解）、「ネクスト」（願い/苦しみや苦労/好きなことや人/途上にあること）など、言葉遊びのユーモアを交えつつも真摯な考察に基づくアイデアが披歴された。発案者の数だけアセスメント項目があることは、そのまま人の価値観や生き様の多様性を表わしており、スピリチュアルケアの可能性の広がりであるとも捉えることができた。

発題者：窪寺俊之教授（右上、左下）
その他：研究会風景

注

1）Carla P. Hermann［Oncology Nursing Forum］Vol.33,No4,2006,pp737-744

2）Robert L. Hatch, Mary Ann Burg, Debra S. Naberhaus and Linda K. Hellmich「The Journal of Family Practice」Vol.46,No 6（June）, 1998 pp.476-477

（文責：田村 綾子［たむら・あやこ］聖学院大学人間福祉学部人間福祉学科准教授）